

他者からのフィードバックの解釈に影響を及ぼす自尊感情の効果

遠藤由美・阪東哲也

Self-esteem and responses to ambiguous feedback from others: Are you absolutely sure others dislike you?

Yumi ENDO and Tetsuya BANDO

Abstract

The purpose of the present study was to investigate the interpersonal function of self-esteem on the interpretation of other's feedback to an individual. A hundred and thirty-four university students were randomly assigned to either an acceptance condition (AC) or rejection condition (RC). They then read a vignette which described a hypothetical situation where a person asked to borrow a notebook from a classmate, and were asked to put their feet into the main character's shoes. In the vignette of AC, the classmate replied "OK, later". In the vignette of RC, the classmate answered "Sorry, I don't have it now." After reading vignettes, participants completed questionnaires about expected acceptance, self-relevant feelings and interpersonal strategy in the future. Participants with higher self-esteem tended to have more negative feelings when they had negative feedback from others. However, participants with lower self-esteem tended to find negative information and arouse negative feelings, regardless whether they were in the AC or in the RC. Our discussion focuses on the function of low self-esteem as a negative interpreter of others' ambiguous responses.

Key words: self-esteem, rejection, acceptance, feedback, sociometer, interpersonal strategy

抄 録

本研究の目的は、自尊感情水準による他者からのフィードバックの解釈に及ぼす影響を検討することである。実験参加者は、大学生134名で、受容条件（AC）と拒絶条件（RC）とにランダムに割り当てられた。その後、ノートを貸してもらえるように要請する仮想場面を想起させるビニエットを読ませた。ACのビニエットでは、友人の反応を“うん、後でね”と提示し、RCのビニエットでは、友人の反応を“今もってないから、ごめんね”と提示した。ビニエットを読ませた後、受容期待、自己関連感情、対人方略について評定させた。自尊感情高群はフィードバックのネガティブさに応じて、ネガティブな感情を強く喚起する。しかし、自尊感情低群において、フィードバックのポジティブさと関わりなく、ネガティブな感情を強く喚起する傾向が示唆された。そこで、自尊感情水準による否定的評価の捉え方について考察がなされた。

キーワード：自尊感情、拒絶、受容、フィードバック、ソシオメータ、対人方略

—In playing baseball—

Lucy Van Pelt: What would your fantasy team be, Charlie Brown?

Charlie Brown: A team that doesn't have you on it!

Lucy Van Pelt: I should never ask questions like that.

—Charles, M.S., *Peanuts*—

ヒトは他者からの評価を無視して生きていくことができるだろうか。進化心理学によれば、答えはノーである。人は、他者と協力することによって、熾烈な生存競争を勝ち抜いてきた。自分と共に生きるに値し、自分に危害を与える危険性の少ない他者を相互に選択し、互いが互いのために投資することによって、より強固な関係を形成すること（遠藤, 1997; 亀田・村田, 2000）が、その生存方略として最も強力であったと考えられている（Baumeister & Leary, 1995）。古来、群れ社会の中で、自分の位置を確立し、他者と共同して、関係性を築き上げていくことが生存確率を高めるために最優先事項であった。その関係性を築き上げるプロセスにおいて、自分が思っている関係と他者が思っている自分との関係の両サイドの情報を取り入れて考えなければならない。自分が他者に投資しても、自分の投資量に相当する恩恵を他者から享受することができなければ、それは生存確率を低めることにつながる。つまり、投資先の相手が自分との関係性をどの程度価値のあるものと思っているか（これを関係性評価relational valueと呼ぶ）を監視しなければならない。特に、相手からの否定的評価を受ける場合、関係性が破綻してしまう可能性が生じる。できうる限り早く相手からの否定的評価を察知し、関係性改善のために対策を講じる必要性がある。相手からの関係性評価が肯定的な場合よりも否定的な場合において、相手からの評価に敏感であることが生存上不可欠となる（Baumeister, Bratslavsky, Finkenauer, & Vohs, 2001; Leary & Downs, 1995）。確かに、否定的評価を受けた場合、強い感情が喚起したり、他者に向かって何らかの行動を起こしたりする知見が存在する（see Vohs & Finkel, 2006; MacDonald & Leary, 2005）。このように、人は常に他者が自分との関係性をどう評価しているか、特に相手からの自分との関係性評価が低下しないように監視する必要がある、そのために他者からの評価を監視し、自分の位置を確かめることの出来るシステムが必要であった。このシステムを補助する役割を果たすと考えられているのが自尊感情¹⁾である（Kowalski & Leary, 1999; Leary & Downs, 1995; Leary & Baumeister, 2000; Leary, 2004）。本研究では、自尊感情システムがもつ対人関係における自己の位置の監視およびその後の対人感情・反応における機能について検討したい。

そもそも自尊感情とは何か。従来の自尊感情について、遠藤（1992）は、「self-esteem

とは、人が持っているself-respect、self-acceptanceなどを含め、自分自身についての感じ方をさしている」(p.19)と述べている。しかし、この従来の自尊感情の枠組みで行われている研究には、自尊感情に関する暗黙の仮定があり、その問題点が指摘されている。自尊感情における一連の研究において、1. 自分の自尊感情を守ったり、高めたりするように動機づけられている、2. 自尊感情の高い人は望ましい特性を持っており、自尊感情の高いことは心理的な益があると考えられている、3. 自尊感情を高めると心理的幸福感が高まり、社会的に好ましい行動が見られやすくなることの3点が暗黙の仮定として挙げられる。しかし、それぞれに反証もしくは、因果的な間違いがある (Kowalski & Leary, 1999)。また、遠藤 (1999) は、自己理解のプロセスは個人内で完結するものではなく、他者の反応を通じた社会的過程によって促進されることを挙げて、自尊感情を他者との関係性の観点からとらえ直すことの重要性を強調している。これらの問題点を解決し、人の社会的行動全般を説明することのできる理論として考案されたのが、ソシオメータ理論である (Leary & Downs, 1995; Kowalski & Leary, 1999; Leary, 2004)。

ソシオメータ (socio meter) 理論においては、自尊感情は、自分と他者との関係を監視し、自分がどの程度他者から受容されているかを表す計器 (メータ) として機能するとしている。燃料タンクのメータがFullに近いところを示しているならば、何も不都合はないことを示しているのと同様に、ソシオメータの位置が高いこと、つまり自尊感情の高いことは、自分と他者との関係が良好 (他者から受容された状態) であることを示している。一方、ソシオメータの位置が低いこと、つまり自尊感情の低いことは、自分と他者との関係が不良 (他者から受容されていない状態) であることを示している。そして、ソシオメータは他者との相互作用や自己内省等を通じて変化し、ネガティブな感情、またはポジティブな感情を喚起することによって状況認知を促進させる。自尊感情の感情としての側面は、状況認知を支えることにある (戸田, 1992)。ここに、絶えずアクティブに状況認知を監視する役割をもっているものとしての自尊感情が存在することになる。自己と他者との関係を常に監視し、状況に敏感に反応する自尊感情は、いわゆる状態自尊感情に対応している。事実、他者からの拒絶を経験することによって、状態自尊感情が低下すると報告されている (Leary, Haupt, Strausser, & Chokel, 1998; Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995)。このように状態自尊感情は他者からの拒絶の評価を監視する役割を果たしていると考えられるが、特性自尊感情は適応過程に不必要な感情であろうか。特性自尊感情は、ソシオメータのメータの常態としての基本的位置、つまり、ある他者と自分との関係性に関する情報がないデフォルト状態を表している (MacDonald, Saltzman, & Leary, 2003; Leary, 2004)。

このような2つのタイプの自尊感情を利用することによって、人は他者からの拒絶を回避し、社会生活を営んできたのである。

自尊感情水準（以下、特に断りのない限り、自尊感情という表現は特性自尊感情を表すものとする）が、関係性評価のベースラインの差異を表しているならば、自尊感情水準によって、他者情報の解釈の仕方が異なる可能性が考えられる。自尊感情の低い人は、他者は自分との関係性に価値を置いていると考えることが困難であり、今以上の拒絶の危機を避けたいと思うので、拒絶の危機に対して敏感であろう。一方、自尊感情の高い人は、デフォルトとして、他者は自分との関係性に価値を置いていると思う傾向があり、自尊感情の低い人よりも拒絶に対して敏感でない（Leary, 2004）。特に自尊感情の低い人は、他者から発信された情報が拒絶を含むか否か積極的に監視することが重要であると考えられる。これに対して、自尊感情の高い人は拒絶を監視する必要はあるが、他者から受容されているという主観的確信が影響して、自分が拒絶状況に置かれているかを勘繰る必要性はない。

このことは、人が発信する情報に内包している受容—拒絶の構造を示唆している。Leary (2001) は、受容—拒絶の構造を一次元であるとし、その受容—拒絶の度合いに応じたインデックスを作成している。確かに、受容—拒絶を一次元で考えることは、過去の受容—拒絶の研究を相対的に位置づける役割を果たしている。しかし、本来、他者の言動は、そもそも自分との関係性評価（受容—拒絶）を必ず含んでいるとは限らない。例えば、眼前の他者が自発的に話そうとせず、こちらからの働きに対しても反応が鈍いという場合、それは「私を避けているから」とは限らず、たまたまその人が非常に疲れていた、あるいは悩んでいたという本人の事情があるからかもしれない。自分が他者からの情報に基づいて、主観的に受容—拒絶の位置関係を判断し、意味を与えているに過ぎない（Pronin, Gilovich, & Ross, 2004）。MacDonald & Leary (2005) は、他者からの情報における受容情報と拒絶情報とは、別次元で考えたほうがよいのではないかと考察している。筆者は、受容情報と拒絶情報に加えて、受容—拒絶の判別に価値のない情報の3つの情報が混在していると考えている。これらの情報を解釈する過程において、受容—拒絶の一次元の中のどこかに主観的に位置づけられると考えたほうがより適切ではないだろうか。先行研究における他者からの拒絶情報のフィードバックは、偽フィードバックを与え、将来孤独になることを予期させたもの（Twenge, Catanese, & Baumeister, 2002; Baumeister, Dewall, Ciarocco, & Twenge, 2005）、共同作業相手としての選択・非選択をフィードバックするもの（Buckley, Winkel, & Leary, 2004）、他者からの評価を得点によってフィードバックするもの（Buckley et al, 2004）が挙げられる。先行研究におけるフィードバックは、そこに他者からの評価

情報を含んでいることが明白であり、積極的に解釈を要しない。他者からのフィードバックに含まれているネガティブ情報は、自分への能力評価の側面が強調されており、他者からの拒絶情報としてではなく、能力の否定情報や単なる気分を害する不満情報として捉えられている可能性がある。拒絶という危機的状況を巧みに操作している研究として、コンピュータ上で架空の相手とのボールのやり取りを行う cyberball パラダイム (e.g., Williams, Cheung, & Choi, 2000) や、両隣の人が自分を無視して話をする “O” train パラダイム (e.g., Zadro, Williams, & Richardson, 2005) があり、他者から拒絶されるという状況（拒絶状況かどうかを解釈する）を十分に与えうるだろう (see Williams, 2001)。

これらのことを踏まえると、自尊感情の高い人は、他者からの受容を求めるので、他者から曖昧な反応を得た場合、つまり、拒絶されているとも受容されているともどちらでも解釈できる可能性があるような場合、拒絶の可能性を低く評定することが考えられる。一方で、自尊感情の低い人は、他者から受容されているにも関わらず、今以上に拒絶されるという危機を回避したいので、受容情報であっても、拒絶の可能性を高く評定することが考えられる。遠藤 (2006) は、参加希望を断られる拒絶場面と、他者から黙殺される排斥場面のいずれかのビニエットを読ませ、自尊感情の低い人が、他者から拒絶されていることが不明確な場面において、拒絶されていることが明確な場面よりも、他者からの受容期待度を低く評定することを明らかにしている。もし、自尊感情水準によって、他者からの情報の解釈の仕方が異なるとすれば、確かに受容のサインなのだが、そのサインが拒絶であると解釈することもできる場合、自尊感情の低い人は他者からの受容と一般には受け止められるような対応を拒絶であると解釈するのではないか。曖昧な意味合いから拒絶情報を検出するソシオメータの機能を検証することが本研究の目的の一つである。

また、人間関係の調整を動機づけるソシオメータの機能を検討する。そのため、本研究では他者への再要請場面を設定する。ソシオメータは、相手に自分との関係性価値を今以上に低く評価させないように、拒絶のサインを検出するとネガティブな感情を喚起させることによって、向社会的行動に動機づけられる機能をもつと考えられている (Leary, 2004)。しかし、ネガティブな感情が仲介変数となって、向社会的行動が動機づけられる結果が得られているのは、Williams et al (2000) の知見のみである (see Leary, Twenge, & Quinlivan, 2006; Vohs & Finkel, 2006)。一方、Murray (1938) は、対人魅力の一つとして、相手から好かれていることを挙げている。また、Elliot, Gable, & Mapes (2006) は、受容への期待、拒絶の予期というそれぞれの社会的動機づけが高まることによって、友人への接近一回避という社会的目標に影響を与える階層的なモデルを、Structural Equation

Modelingという分析手法を用いて検討した。最終的に採用されたモデルでは、拒絶への予期が友人との関係回避に影響を与え、受容への期待が友人との関係接近に影響を与える可能性を示唆していた。これらの知見は一見すると矛盾しているように思える。すなわち、ソシオメータ理論では、拒絶のサインを検出すると、関係を改善する行動に動機づけられるとしている。ところが、他方、社会的動機と社会的目標の観点からは、拒絶のサインは関係を回避する行動に動機づけられることが示唆されている。しかし、これらの知見は相互に矛盾するわけではない。なぜなら、人間関係のネットワークがあればあるほど、望ましいわけではないからである。人間関係のネットワークは維持していくのに多大なコストを要する（遠藤，2006）。従って、自分と関係をもつ他者と互助することによって、自分の生存確率を最大限高められる行動に動機づけられる必要がある。つまり、自分に恩恵をもたらさない他者とは自分の負担ばかりが増えていく可能性があるため、その関係性を低めることのほうが適応的であると考えられる。その一方で、自分に恩恵をもたらす他者は、今後も同様に互助関係が成立する可能性が高い。互助できる他者とは、関係性評価が低下しては困るので、ネガティブな感情を喚起させることによって、関係性評価を改善させるように動機づけられる必要がある。つまり、ソシオメータとEliot et al (2006)の知見は、今置かれている状況を社会的文脈の中で解釈し、より合理的、適応的な選択をした結果であると考えられる。そこで、本研究において、特に拒絶のフィードバックを受けた場合、ソシオメータ理論の知見が支持されるのか、それともEliot et al (2006)の知見が支持されるのか探索的に検討する。

方 法

手続きの概略：本研究は、質問紙実験で行った。実験参加者は、自尊感情尺度に回答した後、受容か拒絶のいずれか一方のビニエットを読み、自己関連感情（状態自尊感情）、対人方略、受容期待の種々の設問を評定した。

手続き：本研究の手続きは以下の通りに行われた。実験参加者に質問紙を配布し、注意事項を読ませてから、フェースシートに年齢・性別を記入させ、Rosenberg (1965)の自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982による日本語訳）に、「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」までの5件法で評定を求めた。

本研究は質問紙実験とし、二種類の異なるバージョンの質問紙を作成した。1つは友人からのフィードバックの意味合いが一般的に受容的であるが、しかし明確に受容だとは断言できないようなフィードバックを受ける受容条件である。もう1つは友人からのフィー

ドバックの意味合いが一般的に拒絶的であるが、しかし明確に拒絶だとは断言できないようなフィードバックを受ける拒絶条件である。実験参加者にはいずれか一方の質問紙を配布し、二種類の質問紙が存在することについての情報については与えなかった。場面設定は二種類の質問紙に共通で、「仲の良い友人がいない授業で、顔見知り程度の友人に対して、あなたが、『授業を休んでいた分のプリントやノートをコピーさせてほしい』とお願いしている場面を思い浮かべてください」とした。そして、受容条件では以下のような文がそれに続いた。

上の場面で、「休んだ分をコピーさせてほしい」とあなたがお願いした後、その友人は次のように答えました。

「うん、後でね。」

また、拒絶条件では、以下のように提示した。

上の場面で、「休んだ分をコピーさせてほしい」とあなたがお願いした後、その友人は次のように答えました。

「今もってないから、ごめんね。」

フィードバックを読む前後で、以下の種々の設問への回答を求めた。

自己関連感情（状態自尊感情）：McFarland & Ross（1982）、Leary et al.（1998）を参考に、1. 誇らしい、2. 心配である、3. 憂鬱である、4. うろたえている、5. 落ち着いている、6. 恥ずかしい、7. きまりが悪い、8. 気持ちが楽である、9. 満足している、10. 自分に自信がある、の10個の項目を用いた。そして、それぞれの感情をどの程度感じるか自分の気持ちに最も近いものを、「感じない(1)」から「感じる(5)」までの5段階尺度上で評定を求めた。

対人方略：「もう一度、あなたがプリントやノートのコピーをお願いする場面になったとき、あなたは、その友人にお願いしたいと思いますか」「もう一度、あなたがプリントやノートのコピーをお願いする場面になったとき、あなたは、他の友人にお願いしたいと思いますか」の2項目を「そう思わない(1)」から「そう思う(4)」までの4件法で自己評定を求めた。

受容期待：自分の要請を引き受けてくれる可能性と判断理由を回答させた。フィードバ

ックの前後で、自分の要請を相手が受け止めてくれる可能性について、0から100までの数値で回答を求めた。そのように可能性を判断した原因・理由を特定するために、判断理由の自由記述を求めた。その際、実験参加者が答えやすいように、回答例として、「直感的に」「相手がそういっているから」「だいたいお願いを聞いてくれるから」などを提示した。

実験参加者：国立H大学の大学生150名である。そのうち、回答に不備のない134名（男性35名、女性99名、平均年齢21.6歳、有効回答率89.3%）を調査対象とした²⁾。

結果と考察

操作の確認：この実験では、受容条件と拒絶条件の2つの条件を設けた。それぞれのフィードバックが、より受容・より拒絶として受け止められたか否かを確認するために、フィードバック後の受容期待を測定する1項目を検討した。平均値は受容条件で、 $M = 58.50$ ($SD = 25.61$)、拒絶条件で、 $M = 44.90$, ($SD = 28.54$)であった。チャンスラインである50%を基準に*t*検定を行ったところ、受容条件は1%水準で有意であり ($t(63) = 2.66$, $p < .01$)、拒絶条件では傾向差が認められた ($t(69) = -1.50$, $p < .10$)。従って、チャンスラインを基準に、それぞれのフィードバックはより受容的、より拒絶的であると実験参加者に受け止められていると見なすことができ、操作の有効性が確認された。

自己関連感情（状態自尊感情）：高得点ほどネガティブであることを表すように、自己関連感情を測定する10項目を得点化した。Cronbachの α 係数 ($\alpha = .753$) は十分に高かったため、尺度の信頼性は確認されたものと考え、10項目すべての合計得点をSRF得点とした。SRF得点を従属変数として、2（自尊感情：高群・低群） \times 2（フィードバック：受容・拒否）の分散分析を行った。その結果、自尊感情による主効果 ($F(1,130) = 8.0$, $p < .01$) と、フィードバックと自尊感情による交互作用 ($F(1,130) = 3.9$, $p < .05$) が5%水準で有意であったので、下位検定を行ったところ、受容のフィードバックを受けた自尊感情群の間に1%水準の有意差が認められた ($F(1,130) = 11.01$, $p < .01$)。また、拒否のフィードバックでは自尊感情群の間に有意差は認められなかった ($F(1,130) = 0.38$, $ns.$)。自尊感情低群では、フィードバックによる有意差が認められず ($F(1,130) = 0.19$, $ns.$)、自尊感情高群では、フィードバックの間で5%水準の有意差が認められた ($F(1,130) = 5.26$, $p < .05$) (図1)。つまり、受容のフィードバックを受けるよりも ($M = 28.52$, $SD = 5.33$)、拒否のフィードバックを受ける方が ($M = 25.21$, $SD = 4.74$)、自尊感情高群はネガティブな自己関連感情を経験した。一方、自尊感情低群は、フィードバックによる自己関連感情への影響が見られないことが明らかになった。自尊感情低群は今以上の拒絶の状況に陥らないようにする

ことが優先される (Leary, 2004)。従って、相対的には受容のフィードバックであるとしても、拒絶を含んでいる可能性がある場合、自尊感情低群は受容されていると判断するのではなく、まず、拒絶される可能性がないかを考えるため、より肯定的な自己関連感情が喚起されないのではないかと推測される。

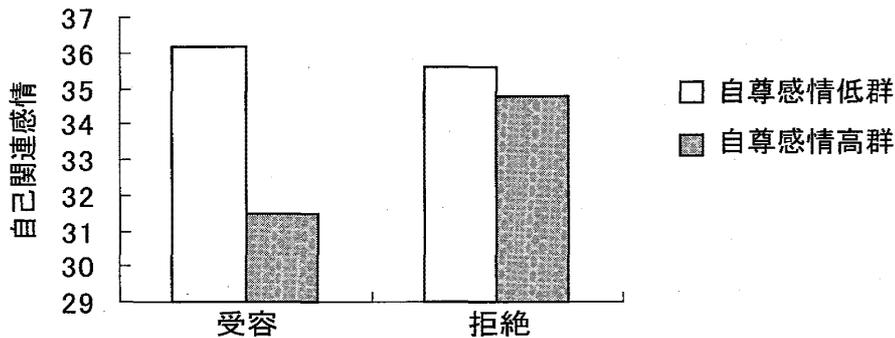


図1 受容・拒絶条件におけるネガティブな自己関連感情に及ぼす自尊感情の効果

対人方略：対人方略の2項目はそれぞれ高得点ほど、再び要請する機会があった場合に、要請した相手/第三者に要請する可能性が高いことを表すように得点化した。当初の相手に再び要請する可能性得点を友人再接近得点、第三者に要請する可能性得点を第三者接近得点とした。

まず、友人再接近得点を従属変数として、2 (自尊感情:高群・低群) × 2 (フィードバック:受容・拒否) の分散分析を行ったところ、フィードバックによる主効果で有意傾向が見られた ($F(1,130) = 3.2, p < .10$)。また、フィードバックと自尊感情による交互作用が5%水準で有意であったので ($F(1,130) = 6.1, p < .05$)、下位検定を行った。受容のフィードバックを受けた自尊感情水準の間に1%水準の有意差が認められた ($F(1,130) = 7.96, p < .01$)。また、拒否のフィードバックでは自尊感情水準の間に有意差は認められなかった ($F(1,130) = 0.40, ns$)。自尊感情低群では、フィードバックによる有意差が認められず ($F(1,130) = 0.27, ns$)、自尊感情高群では、フィードバックの間に1%水準の有意差が認められた ($F(1,130) = 8.40, p < .01$) (図2)。拒否のフィードバックを受けたときは ($M = 2.06, SD = 0.75$)、受容のフィードバックを受けたとき ($M = 2.69, SD = 0.85$) よりも、自尊感情高群は友人へ再び要請する可能性を低める。つまり、拒絶の可能性がある場合には、それと同じ状況を作り出さないよう行動しようとしたのではないかと考えられる。それとは異なって、自尊感情低群は、フィードバックによる変化は見られないことが明ら

かになった。つまり、受容のフィードバックであっても、それを受容とは受け止めない傾向があり、従って、拒絶のフィードバックを受けた参加者と同程度に、当該の友人に再度要請しない傾向がある。これは、自尊感情高群が受容のフィードバックを受容として受け止め、その人に再度依頼を要請しようとするのとは対照的であり、自尊感情低群は受容してくれる人を肯定的に受け止めずに自ら受容される機会を減少させてしまうことを示唆している。

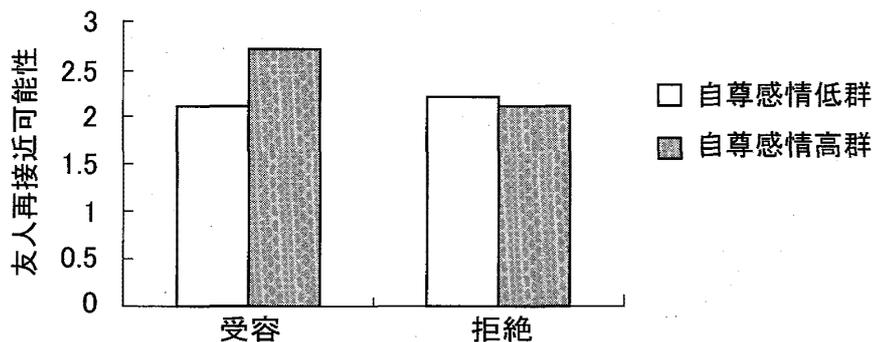


図2 受容・拒絶条件における友人再接近可能性に及ぼす自尊感情の効果

次に、第三者接近得点を従属変数として、同様の分析を行った。その結果、フィードバックの主効果、自尊感情の主効果、および交互作用はすべて有意水準に達しなかった。他者への接近—回避に関して、2つの異なる方向がこれまで示唆されている。1つは、ソシオメータ理論の観点から、拒絶の危機を検出した場合、その危機を回避するために向社会的行動に動機づけられ、より一層相手に関わっていく可能性である。他の1つは、Eliot et al. (2006) の知見から、拒絶した相手を回避する可能性である。本研究においては、受容のフィードバックを受けた自尊感情低群において、要請を受け入れている相手に対して、再び関わろうとする傾向が低くなることが示され、後者の知見と合致している。本研究では、判断理由の回答を求めているので確証はもてないが、ノートを借りるという日常的な場面での拒絶は、ノートを借りられない事態を、ノートさえ借りられない事態だと判断して、その拒絶による関係性の改善が難しいと解釈しているのではないかと考えられる。ソシオメータが拒絶であると判断するのは、自分が理想としているベースラインを下回るような特別な情報を受けたときである (Leary, 2004)。そのように考えると、ノートを借りるという些細で日常的な出来事だからこそ、その要請を受け入れてもらえない事態は、特に根本的な拒絶情報として扱われ、関係性を改善するように動機づけられないのではなかろうか。このことは、受容期待を判断した理由の記述で、「一度断られたら、もう

同じ人に頼むことが出来ない」「他にも頼むことのできる友人がいる」と回答している実験参加者がいることから、突飛な発想ではないだろう。このような日常的で身近な拒絶の出来事ほど、相手との関係性が低く評定される可能性について、今後検討する必要がある。

受容期待：フィードバック前後の受容期待は、実験参加者が記入したパーセンテージをそのまま得点とし、フィードバック前の受容期待を pos1 得点、フィードバック後の受容期待を pos2 得点とした。また可能性判断の自由記述はフィードバック前の可能性の判断理由を pos1 理由、フィードバック後の可能性の判断理由を pos2 理由とした。

pos1 得点について、自尊感情水準（高群・低群）で t 検定を行ったところ、5%水準の有意差が認められた ($t(128.5) = 2.41, p < .05$)。このことは、他者との相互作用のない状態において、自尊感情高群 ($M = 83.97, SD = 12.74$) は、自尊感情低群 ($M = 77.65, SD = 17.54$) よりも自分の要請を相手が引き受けてくれる可能性を高く評定することを示唆しているといえる。

次に、フィードバック後の受容期待の変化量を分析するために、pos1 得点から pos2 得点を引いた値を従属変数として、2（自尊感情：高群・低群）× 2（フィードバック：受容・拒絶）の分散分析を行った。その結果、フィードバックの主効果が 5%水準で有意であった ($F(1,130) = 5.67, p < .05$)。自尊感情の主効果は有意ではなかった ($F(1,130) = 0.15, ns.$)。フィードバックと自尊感情による交互作用に有意傾向が認められたので ($F(1,130) = 3.66, p < .10.$)、下位検定を行ったところ、自尊感情高群では、フィードバックの間で 1%水準の有意差が認められた ($F(1,130) = 8.57, p < .01$) (図 3)。受容フィードバック後において、自尊感情高群は ($M = 18.76, SD = 22.24$)、自尊感情低群 ($M = 28.66, SD = 25.32$) よりも自分の要請を相手が引き受けてくれる可能性の調整量が小さく、また、拒絶のフィードバック後では、自尊感情水準による可能性の調整量に変化が見られないことが明らかになった。

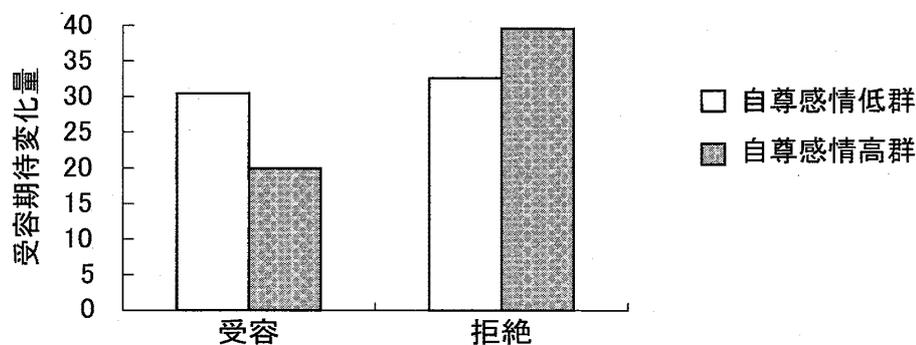


図 3 フィードバック前後の受容期待変化量

次に、状況判断の原因帰属の違いを検討するために、pos1理由とpos2理由のコーディングを行った。コーディングの手続きは、筆者がKJ法による分類を行った後、協力者1名に、筆者の分類したカテゴリーの説明をした後、それぞれの項目がどのカテゴリーに属するかを分類させた。協力者との分類の一致率は94.0%であった。一致しなかった項目については、筆者と協力者とで話し合い、どのカテゴリーに属するかを決定させた。項目の分類結果は表1に示した通りである。なお、pos1理由およびpos2理由において、複数の理由を記述している実験参加者もいたが、カテゴリーに分類した結果では、書かれている理由はすべて同じカテゴリーに分類され、判断理由が複数のカテゴリーにまたがる実験参加者はいなかった。

表1 KJ法による受容期待可能性の判断理由の分類結果

カテゴリー	代表的な項目
自分の経験から	なんとなく、自分だったらする、……など
自分次第で借りられる(借りられない)から	お礼をするから、……など
相手が貸してもいいと思っているから	断る理由がない、……など
相手はいい人だと思うから	相手はいい人だ、優しいから、……など
相手はしないと思っているから	断る口実にいっていると思う、……など
自分や相手以外の要素から	忘れるかも、会うか微妙、……など
他の人に頼むから	他にも頼める人がいるから、……など

まず、pos1理由を自尊感情水準別にクロス集計し、探索的に分析を行った(表2)。pos1理由では、 χ^2 検定の結果、傾向差が認められた($\chi^2(6) = 11.6, p < .10$)。そこで、どの項目で有意差があるのかを確認するため、残差分析を行ったところ、自尊感情低群のほうで記述数の多かった項目は、「相手が貸してもいいと思っているから」であり($\chi^2(1) = 7.3, p < .01$)、自尊感情高群のほうで記述数の多かった項目は「自分や相手以外の要素から」であった($\chi^2(1) = 6.6, p < .01$)。このことから、フィードバックを受ける前では、自尊感情によって、自分の要請をなぜ相手が引き受けてくれるかについて実験参加者が考える理由が異なっている可能性が示唆された。

表2 自尊感情水準別の受容期待判断理由 (フィードバック前)

	pos1理由						
	自分の 経験から	自分次第で 借りられる (借りられない) から	相手が貸しても いいと 思っているから	相手が いい人だから	相手は したくないと 思っているから	自分や相手以外 の要素から	他の人に 頼むから
SE-L群	24	9	8	14	8	9	0
SE-H群	22	6	0	10	5	19	0

次に、pos2理由をフィードバック・自尊感情水準別にクロス集計し、どの項目で差があるか探索的に同様の分析を行った (表3)。pos2理由では、拒絶のフィードバックで整理された7項目の間では有意差が認められなかったが ($\chi^2(6) = 5.6, ns.$)、受容のフィードバックでは5%水準の有意差が認められた ($\chi^2(6) = 14.0, p < .05$)。そこで、どの項目で有意差が認められるのか確認するため、残差分析を行ったところ、自尊感情高群の記述数が多かった項目としては「相手がいい人だから」であり ($\chi^2(1) = 6.6, p < .05$)、自尊感情低群の記述数が多かった項目としては「相手はしたくないと思っているから」で傾向差が認められた ($\chi^2(1) = 3.1, p < .10$)。このことは、相手からのフィードバックを受けた後、自尊感情によって、自分の要請を相手が引き受けてくれる状況判断の理由が、特に受容のフィードバックの場合に異なっている可能性があることを示唆している。

表3 自尊感情水準別の受容期待判断理由 (フィードバック後)

	pos2理由						
	自分の 経験から	自分次第で 借りられる (借りられない) から	相手が貸しても いいと 思っているから	相手が いい人だから	相手は したくないと 思っているから	自分や相手以外 の要素から	他の人に 頼むから
受容							
SE-L群	6	1	3	1	13	10	1
SE-H群	3	4	0	7	5	8	2
拒否							
SE-L群	5	1	1	5	13	10	2
SE-H群	2	4	1	4	10	12	0

フィードバックのないデフォルト状態では、自尊感情水準によって受容期待が異なることが明らかになった。自尊感情低群において受容の可能性を低く評定する。一方、自尊感情高群において受容の可能性を高く評定する。この結果は、先行研究の知見と合致している (Buckley et al., 2004; Leary, 2004)。自尊感情の低い人が、他者は自分との関係性に価値をおいていないと考える傾向を表しているといえる。自尊感情低群で「相手が (特に困

ることもないから)貸してもいいと思っている」という理由でフィードバックの判断を行う傾向が見られたことと整合性がある。それに対して、自尊感情の高い人は、他者が自分との関係性に価値をおいていると考える傾向を表しているといえる。自尊感情高群では「一般的に人は貸してくれるものだ」という理由でフィードバックの判断を行う傾向が見られたことと整合性があるといえる。

フィードバック後では、自尊感情の高い人はフィードバックの意味合い通りに受容期待を解釈する。一方で、自尊感情の低い人は一般に受容だと思われているフィードバックであっても、明確に受容であると断定できない場合、受容期待を低く評定する可能性のあることが明らかになった。この結果は仮説を支持している。受容のフィードバックにおいて、自尊感情低群は、「相手はしたくないと思っているから」という理由で判断を行う傾向がある。それに対して、自尊感情高群では「相手がいい人だ」という理由で判断を行う傾向がある。これらの判断理由は、相手から拒絶される情報の解釈に違いがあることを示唆している。自尊感情の低い人は、他者は自分との関係性価値を置きにくいと思う状態がデフォルトであるから、今以上拒絶される危機を回避するために、自尊感情の高い人よりも他者から拒絶されることに敏感な必要がある (Leary, 2004)。しかし、それ以上に、自尊感情の低い人は(自分は)他者から受容されていると思っていたのだが、他者から拒絶されるという状態に実際に陥りたくないという動機に基づいて、相手からの情報を解釈しているのではないかと筆者は考える。ここで、本稿の冒頭に掲げた逸話を用いて説明しよう。ルーシーは「きっと、チャーリー・ブラウンは、自分のことを大事な友達だと思っているだろう」と思っていた。しかし、ルーシーは、「あなたにとって、理想のチームはどんなチーム?」とチャーリー・ブラウンに尋ねると、彼女の予想に反して、「ルーシー、君がいないチームさ」と答えられてしまう。そして、「聞くんじゃなかったわ」とルーシーは眩く。自尊感情の低い人は、ルーシーの「聞くんじゃなかったわ」と言わなければならない状況を避けたいと考えられる。本研究のデザインでは、フィードバックを受容より、拒絶よりの一つずつに固定したこと、フィードバック自体を受容—拒絶のどちらで解釈したかを実験参加者に直接回答を求めていることが問題点として挙げられる。従って、自尊感情低群において受容のフィードバックによる影響が見られなかったことが、受容のフィードバックの天井効果によるものか、受容のフィードバックを拒絶だと解釈した結果によるものか、確証は得られてはいない。しかし、拒絶されているか否かが曖昧な状況下で、より強く否定的感情が喚起されることが明らかになっている (遠藤, 2006; Williams et al, 2000)。このことを踏まえると、フィードバックが持つ意味が曖昧であるほど、他者から

拒絶される可能性が（主観的なレベルで）高まると解釈するほうが自然であろう。その結果、（現実にはあるかどうか分からない）他者から拒絶されるという予期が働き、自尊感情の低い人は受容の可能性を低く評定してしまうのではないだろうか。今後、自尊感情水準が関係性評価、関係性評価の判断の理由に及ぼす影響について、検討を重ねる必要がある。

結 論

自分の要請に対して、他者から曖昧さを含むフィードバックを受け取ったときに、自尊感情水準によってその解釈がどのように異なるかを検討した。その結果、自尊感情高群では、受容フィードバックによる否定的感情はあまり喚起されなかった。しかし、自尊感情低群では、どちらのフィードバックにおいても強い否定的感情が喚起された。これは、自尊感情高群が、相手はいい人だからきっとやってくれるだろうという楽観的に解釈したのに対し、自尊感情低群では、（そうは言っているもの）相手は要請を引き受けるのが嫌で、仕方なくしているのでは、とより悲観的に解釈したためだと考えられる。そう解釈することによって、自尊感情高群では、否定的感情をあまり経験することなく、もう一度その相手にアプローチしていく一方、自尊感情低群では否定的感情を強く経験するとともに、再びアプローチする可能性が低くなることが明らかになった。このことは、他者からのメッセージに解釈の余地がある曖昧な状況の場合、自尊感情低群は、自分の思いと主観的現実がボタンの掛け違えのように、下方に激しくズレないようにするために、あらかじめ情報を拒絶寄りに解釈してしまう可能性を示唆している。

対人方略について、自尊感情高群はフィードバックに応じて、再要請する可能性を調整する。その一方で、自尊感情低群は曖昧さを含むフィードバックを受け取ったときに、フィードバックとは関係なしに、再要請する可能性を低く評定することが明らかになった。しかし、本研究では探索的な分析にとどまった。今後自尊感情水準・状況によって、今の人間関係を改善・維持しようとする方略と新しい人間関係に向かう方略のどちらがとられるかを検討することが必要である。

注

- 1) self-esteemを自尊感情と訳出したのは、self-esteemの持つ感情の側面によって、状況認知を支えているというソシオメータ理論の基本的な考えに基づいている(戸田, 1992)。
- 2) 自尊感情の高さによる群分けを行うために、自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)の合計得点を求め、高得点ほど自尊感情が高いことを表すように得点化した。その後、尺度の信頼性を確かめるためにCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .839$ であったので、尺度の信頼性は確認されたものと考え、10項目すべての合計得点を自尊感情得点とした。そこで、自尊感情得点の平均値(M=30.7, SD=6.7)を基に、30点以下の実験参加者を自尊感情低群(N=72)とし、31点以上実験参加者を自尊感情高群(N=62)とした(表4)。

表4 条件別の自尊感情得点の平均値と標準偏差*

	受 容	拒 絶
自尊感情高群 (N=62)	36.69 (4.34)	36.33 (4.23)
自尊感情低群 (N=72)	26.26 (3.67)	25.32 (3.76)

* () 内は標準偏差。

引用文献

- Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., Finkenauer, C., & Vohs, K. D. 2001 Bad is Stronger Than Good. *Review of General Psychology*, 5, 4, 323-370.
- Baumeister, R. F., DeWall, C. N., Ciaracco, N. J., & Twenge, J. M. 2005 Social exclusion impairs self-regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 589-604.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Buckley, K. E., Winkel, R. E., & Leary M. R. 2004 Reactions to acceptance and rejection: Effects of level and sequence of relational evaluation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 14-28.
- Charles, M. S. 1988 *Peanuts*. United Feature Syndicate, Inc.
- チャールズ, M. シュルツ 谷川俊太郎(訳) 1991 *A PEANUTS BOOK featuring SNOOPY* 4. 角川書店
- Elliot, A. J., Gable, S. L., & Mapes, R. R. 2006 Approach and Avoidance Motivation in the Social Domain. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 378-391.
- 遠藤辰夫・井上祥治・蘭千壽 1992 セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版
- 遠藤由美 1997 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下 心理学研究, 68, 5, 387-395
- 遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, 39, 2, 150-167.
- 遠藤由美 2006 自尊感情が社会的排除・拒絶への反応に及ぼす効果 関西大学社会学部紀要, 37, 2, 29-41.
- 亀田達也・村田光二 2000 複雑さに挑む社会心理学 適応エージェントとしての人間 有斐閣アルマ
- Kowalski, R. M. & Leary, M. R. 1999 *The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of Social and Clinical Psychology*. Psychology Pr. 安藤清志・丹野義彦(訳) 2001 臨床社会心理学の進歩 実りあるインタフェースをめざして 北大路書房
- Leary, M. R. 2001 *Interpersonal rejection*. New York: Oxford University Press.
- Leary, M. R. 2004 The sociometer, self-esteem, and the regulation of interpersonal behavior. In R. F. Baumeister & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation*. New York: Guilford.
- Leary, M. R. & Baumeister, R. F. 2000 The nature and function of self-esteem: sociometer theory. In M. Zanna

- (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 32, 1-62. San Diego: Academic Press.
- Leary, M. R. & Downs, D. L. 1995 Interpersonal function of the self-esteem motive: The self-esteem system as a sociometer. In M. Kernis (Ed.), *Efficacy, Agency, and Self-Esteem*, pp. 123-144. New York: Plenum.
- Leary, M. R., Haupt, A. L., Strausser, K. S., & Chokel, J. T. 1998 Calibrating the Sociometer: The Relationship Between Interpersonal Appraisals and State Self-Esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 5, 1290-1299.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. T., & Downs, D. L. 1995 Self-esteem as an Interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- Leary, M. R., Twenge, J. M., & Quinlivan, E. 2006 Interpersonal rejection as a determinant of anger and aggression. *Personality and Social Psychology Review*, 10, 2, 111-132.
- MacDonald, G. & Leary, M. R. 2005 Why Does Social Exclusion Hurt? The Relationship Between Social and Physical Pain. *Psychological Bulletin*, 131, 2, 202-223
- MacDonald, G., Saltzman, J. L., & Leary, M. R. 2003 Social approval and trait self-esteem. *Journal of Research in Personality*, 37, 23-40.
- McFarland, C. & Ross, M. 1982 Impact of Causal Attributions on Affective Reactions to Success and Failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 5, 937-946.
- Murray, H. A. 1938 *Explorations in personality: a clinical and experimental study of fifty men of college age*. New York: Oxford University Press.
- Pronin, E., Gilovich, T., & Ross, L. 2004 Objectivity in the Eye of the Beholder: Divergent Perceptions of Bias in Self Versus Others. *Psychological Review*, 111, 3, 781-799.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 戸田正直 1992 感情一人を動かしている適応プログラム. 認知科学選書, 24, 東京大学出版会
- Twenge, J. M., Catanese, K. R., & Baumeister, R. F. 2002 Social exclusion causes self-defeating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 606-615.
- Vohs, K. D. & Finkel, E. J. 2006 *Self and relationships: The interplay between intrapersonal and interpersonal processes*. New York: Guilford.
- Williams, K. D. 2001 *Ostracism: The power of silence*. New York, NY: Guilford Publications.
- Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. 2000 Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 748-762.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- Zadro, L., Williams, K. D., & Richardson, R. 2005 Riding the 'O' Train: Comparing the Effects of Ostracism and Verbal Dispute on Targets and Sources. *Group Processes & Intergroup Relations*, 8, 2, 125-143.

謝 辞

本研究に参加して下さった兵庫教育大学の学生のみなさまに心から感謝の意を表したい。本論文の執筆にあたり、分析の手伝いをして下さった兵庫教育大学の並川富紀子さん、有益なアドバイスをくださった兵庫教育大学講師秋光恵子先生、および関西大学大学院社会学研究科の岡崎奈々さんと玉宮義之さんに感謝申し上げます。